

井上ひさし

しみじみ日本！
乃木大将



新潮文庫

し み じ み ^{にほん}日本 ・ ^{のぎたいしょう}乃木大将

新潮文庫

い - 14 - 22



平成元年三月二十五日印刷
平成元年四月五日発行

著 者 井 上 ひ さ し

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新 潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六―五一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇

振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲專堂製本株式会社

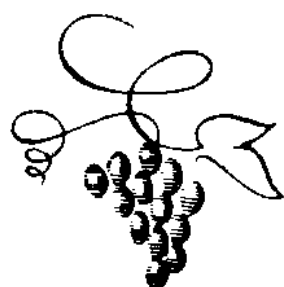
© Hisashi Inoue 1989 Printed in Japan

ISBN4-10-116822-9 C0193

新 潮 文 庫

しみじみ日本・乃木大将

井上ひさし 著



新 潮 社 版

目次

しみじみ日本・乃木大将・・・・・・・・・・・・・・・・七

たいこどんどん・・・・・・・・・・・・・・・・三十五

解説 扇田 昭彦

しみじみ日本・乃^の木^ぎ大将

しみじみ日本・乃木大将

時

基本となる時間の流れは、大正元（一九一二年九月十三日、明治天皇大葬の日の、午後六時から午後八時までの二時間。

所

基本となる場所は、東京赤坂新坂町の陸軍大将、学習院院長、伯爵乃木希典邸の厩舎^{はぐしやくのきまれのしや}。

馬たち、および人びと

こと（壽號ことぶきごうの前足）

ぶき（壽號の後足）

あら（璞號あらたまごうの前足）

たま（璞號の後足）

乃のの字（乃木號の前足）

木きの字（乃木號の後足）

くれ（隣邸くれないどうのメス馬「紅號」の前足）

ない（隣邸のメス馬「紅號」の後足）

はな（近くの馬車屋のメス馬「英號はなぶさごう」の前足）

ぶさ（近くの馬車屋のメス馬「英號」の後足）

陸軍大将乃木希典閣下

乃木大将夫人静子様

感心な辻占つじうら売りの本多武松たけまつ少年（ただし現在は酒屋三河屋の小僧）

1 書生志願

開幕のベルが鳴り終ると同時に、さまざまな音が聞えはじめる。その音は、たとえば、

「竿^{さお}や、青竹」の竹屋、

自転車のベル、

馬車のわだち、

豆腐屋のラッパ、

厩舎の床を掻^かく馬蹄^{ばてい}、

電車、

などである。

できればこの部分は、効果音で構成された「音でつづる明治末期の初秋のあるたそがれどき」といった風の一個の作品であってほしい。

客席がこれらの音に聞き惚^ほれているうちに舞台に照明^{あかり}が入る。するとすでに幕はあがっていて、舞台いっばいに厩舎。厩舎は夕陽^{ゆうひ}を上手の方から受けて、赤々と

燃えるように輝いている。

この厩舎は、煉瓦造りの洋風建築で、右端（すなわち上手際）が馬丁部屋、その他は三等分されていて、右から順に、

壽號（流星の栗毛。十歳。正馬）

璞號（流星の鹿毛。六歳。副馬）

乃木號（紅梅の葦毛。五歳。副馬。水師營でロシアの陸軍中将ステッセル將軍から贈られたアラブ産白馬「壽號」の子）

の、將軍の愛馬が三頭入っている。

上手の馬丁部屋の前に井戸がある。正門は上手の袖の内にあり、下手は乃木邸の勝手口へ通じている。すなわち、客席の下手半分ぐらいに乃木邸が建っているわけである。

舞台に照明が入ったとき、璞號と乃木號はだれている。壽號だけは別で、憂々と

馬蹄で神経症的に床を搔いている。

と、音がぴたりと収まり、照明がたそがれどきのそれから、夜のそれへと変る。

音の消失と照明の変化をきっかけに、壽號はきつとなって下手をみる。乃木號と璞號も下手を注目する。砂利を踏む音がして、乃木大将夫妻が登場。静子夫人は薩摩焼の大鉢を捧げるようにして持っている。大鉢に積みあげてあるのは、三頭の馬の好物であるカステラである。

なお、このときの乃木大将の服装は、大日本帝国陸軍大将の正装。夫人は第一期喪服。すなわち、この日の朝八時に、赤坂田町の秋尾写真館主・秋尾真允まことに撮らせた、あの有名な記念写真と同じいでたちである。

乃木將軍は、思い入れたっぷりに三頭の馬を見ていたが、やがて、

乃木將軍
長い間、世話になったな。

トつぶや呟くように言い、夫人の持っている大鉢から、カステラを三切れとり出し、ま

ず壽號に、

乃木將軍 壽號よ、わしと静子は、長い長い、長い旅行に出かけることになった。淋しがらずに達者で暮すのだぞ。それにしても壽號よ、おまえはなかなかの暴れ馬であつたな。思ひ出すぞ、あのときの腰の痛さを。あれはいつであつたか、四谷見附の手前の坂を学習院に向つて速足で駆けているとき、突然おまえはヒヒーンと後足で立ちあがり、乗っていたわしを地面に投げ出した。何におどろいたのだね、あのときは。馬の背から放り出されたのは、あれが生涯で二度目だ。いうならば、わしはめつたに落馬はしない男なのだが、あのときはなぜ……。

カステラをたべさせながら考え込む將軍に、静子夫人が声をかける。

静子夫人 世間では「乃木將軍の趣味は刀剣と馬。さすがは古武士にふさわしい趣味だ」と申しております。ですから、わたしにもあなたがご自分の馬と別れを惜しむ切ないお気持はよくわかるつもりでございます。けれども程なく、宮城から、前の天皇様の御遺骸を乗せた御鳳輦の出発を報せる大砲の音が聞えてまいりました。その前にわたしどもが致さねばならぬことも、まだいくつか残っております。御馬車が出るまでもう二時間もございますね。

乃木將軍 うむ、残り時間がすくなくなってきましたな。

乃木將軍は壽號の頸をピタピタと叩いて愛撫し、璞號の前に立ち、

乃木將軍（そっけなく）璞號よ、元気でな。

璞號の口にカステラを押し込んで乃木號の前に歩を移す。

乃木將軍 乃木號よ、おまえの父親の「壽號」とも会って別れを告げたいのだが、今となつてはそれもならぬ。この先、おまえが父親に会う機会があったら、乃木がよろしく申していたと伝えておくれ。壽號。あの馬も天晴れな名馬であつたよな。乃木號も知つてのとおり、おまえの父親はロシア国のステッセル將軍の乗馬であつた。忘れもせぬ七年前の明治三十八年の一月五日、すなわち、旅順開城の規約締結調印されて三日目の正午、わしは旅順郊外水師營において、ステッセル將軍と会見した。旅順をきつと落す、いや決して落されるものか、とたがいに死力を尽して百五十日間も闘つた間柄だ。わしとステッセル將軍とは、相手を見る前から、すでに心許し合つていた。そこでわしはステッセル將軍に、鶏五十羽とブドー酒三十本贈つたが、そのお返しにといつて彼がわしにくれたものこそ、彼の名馬「壽號」だつたのだよ。勿論、「壽號」とは、わしが後でつけた名前だ。ステッセル將軍の「ス」をとり、亡き母上の御名が「ことぶき」と「子」とを連ねて壽子